縄紋中期土器底部の溝の分析と土器の乾燥

東大橋原遺跡（ひがしおおはしはらいせき）を中心に

石岡市東大橋　　石岡市教育委員会　金子　悠人

はじめに

東大橋原遺跡は、茨城県石岡市東大橋に所在します（図 1）。標高 20～25 mの石岡台地上に位置しており、縄紋時代から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物が検出されています。周辺は、遺跡北側に園部川を臨み、根古屋遺跡など縄紋中期の遺跡が存在するほか、近世に至るまで数多くの遺跡が存在するエリアとなっています（石岡市遺跡分布調査会 2001）。東大橋原遺跡は、1977～1979 年まで 3 度にわたる学術調査が行われ（川崎他 1978a、1979a、1980 ほか）、以後も継続した試掘・発掘調査・自然科学分析などが実施されています（小杉山 2007、小杉山・曾根 2008、2010 、金子他 2023 ほか）。

1978 年に実施された第 2 次調査では、縄紋時代の住居跡 3 軒、土坑 14 基が検出されました。その一つは土器焼成遺構の可能性が指摘され（川崎他 1979 ほか）、白色粘土など特徴的な遺物が検出されているなど（川崎 1979、金子他 2023 ほか）石岡市のみならず、霞ケ浦周辺の縄紋時代の様相を考えるうえでも重要な遺跡といえます。

今回は、この遺跡で出土した土器底部の「溝」について考察します。

図 1：東大橋原遺跡周辺遺跡地図（石岡市遺跡分布調査会 2001 を基に作成）

1、研究略史

底部に「溝」が付された土器については、1960 年代から着目されています[1]。

大沢鷹邇・芝崎孝（1962）は、東京都中村橋遺跡の土器を紹介する際に、えぐり込んだ溝の存在に言及しています。また、塚田光（1964）は、群馬県新巻遺跡の土器を紹介する中で、底部の「擦りミゾ」を土器の用途を考えることのできる事例として取り上げています。

また、芝崎孝（1972）は関東地方の事例を報告し（図２）、「えぐり込み溝」の特徴について整理するとともに、その意味について、紐をかける用途を見越して焼成前に溝をあらかじめ付したとする説・普遍的な土器でないことから特殊な容器とする説・二次的火熱を受けている形跡がある底部がみられることから、土器に紐をかけ固定したあと煮沸のため火熱を受けた、または紐をかけた後一定期間を経て火熱されるような規定があった等、火熱と関わりがある説など多様な説を提唱しています。

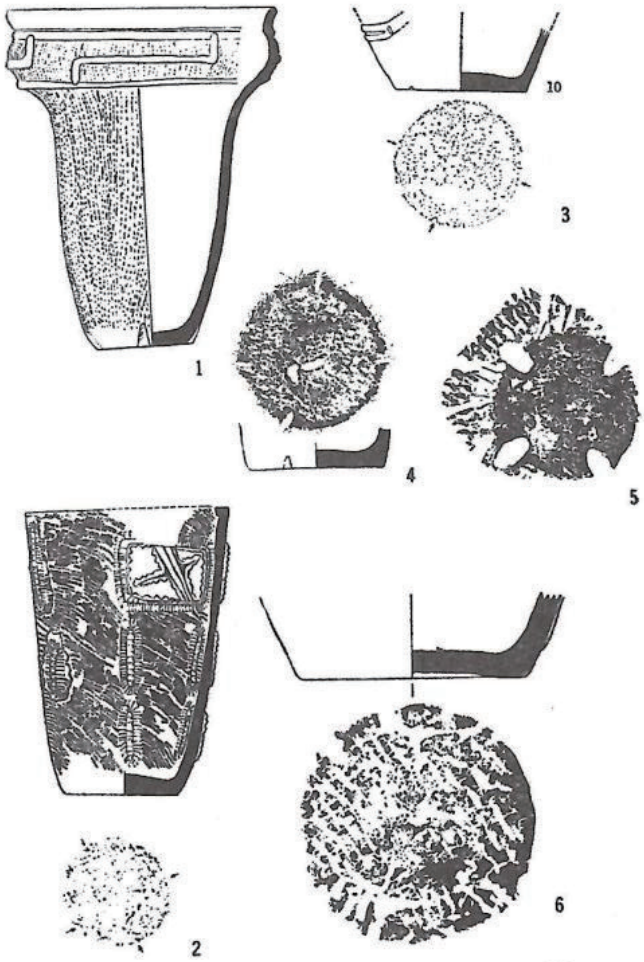


図２：芝崎が報告した「えぐり込み溝」（1972;72 より引用）

荒木ヨシ（1995）は、崇拝という神秘主義の起こる中で、長老が率いる部族の特殊性や伝統と土器底部のえぐり込みが関係する説を提唱しています。

茨城県内においては、新井聡(1996)が中台遺跡の例から、芝崎の説を踏襲しながらも、文様の区画に「えぐり溝」が用いられた可能性を付記しています。

以上のように、底部の溝については若干の考察があるものの、報告書への掲載に限りがあるほか、関心が高まっているとは言えない状況において、数量的な分析ができているとは言えません。

そこで、石岡市でも有数の縄紋中期の遺跡である東大橋原遺跡を対象に、底部の溝について調査を行いました。

なお、研究史上では、「擦りミゾ」「えぐり込み溝」「えぐり溝」など呼称は多様ですが、今回調査した溝の性格上、それらから呼称を決定することは難しいと思われるため、今報告では単に「溝」として記します。

２、調査の方法

東大橋原遺跡で出土している縄紋時代の土器 20,123 点について悉皆調査をおこない、571 点の縄紋中期中葉から後葉と思われる土器底部片が確認できました[(2)]。

溝については、まず目視ならびにルーペ、触手にて観察を行いました。「網代痕」が付着していたとの記述が確認されている(新井 1996)ことから、敷物圧痕の有無についても調査し、溝と敷物圧痕の関係についても確認しました(図３、付表 1)。

溝の形態については、種類があることが認識できたため、A(AA)～E に溝の種類を分類し、小林(1999 ほか)の文様割付の手法で用いられる模式図を応用して、溝の配置も確認しました[(3)]。

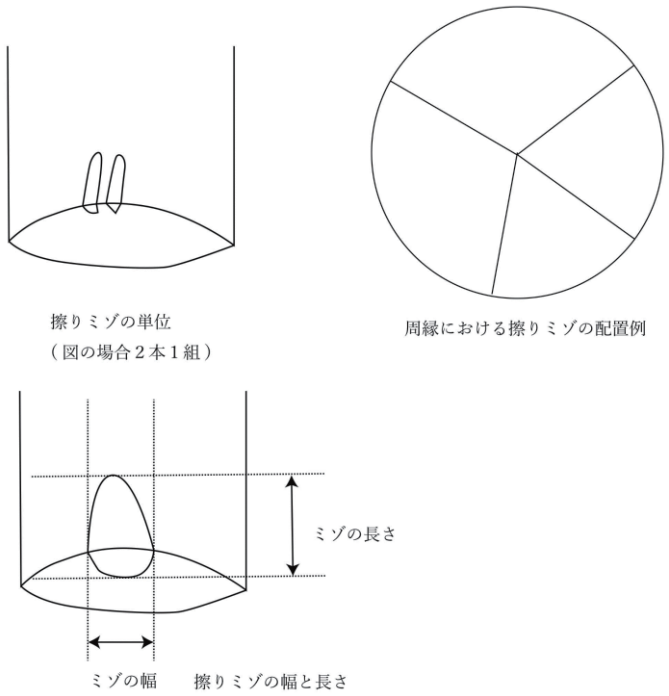


図３：溝の調査部位および計測箇所

また、溝の幅、長さについてデジタルノギスにより小数点第 2 位まで計測したほか、単位や溝の施されるタイミングについても調査しました。

なお、今回溝と呼べないようなくぼみ、粘土の変化、調整方向の変化なども確認できましたが、客観性に欠ける可能性があるため、単体でそれらのみ確認できた個体については分析の対象から除外しました[(4)]。

３、分析

(1)溝の底部数と敷物圧痕の有無

溝が確認できた底部は 62 個体でした(11.3%、62/571-25)[(5)]。確認できた個体のうち、1 個体は浅鉢の底部と思われます(図４)が、他は深鉢でした。

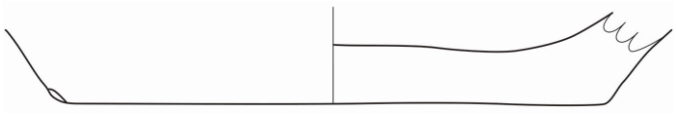


図４：溝が確認された浅鉢の断面(No42)

溝が確認できた底部のうち、敷物圧痕の確認できた個体は 24 個体で、全個体に占める割合は、16.2%(24/155-7)でした。一方、溝が確認できた底部のうち、敷物圧痕の確認できなかった個体は、38 個体で、全個体に占める割合は、9.6%(38/416-18)です。

溝と敷物圧痕については、若干の比率の差はあるものの、明確な差異はありませんでした。

(2)溝の分類

溝については、その特徴から５つに分類しました。

AA・A：溝に素材の痕がほぼなく、平滑。丸みを帯びている。(AA が大沢・芝崎(1962)での中村橋遺跡のような大きなもの。AA と A では大きさ以外に大差はない)

B：溝が細く鋭い。素材の痕の区別がつきづらいもの。

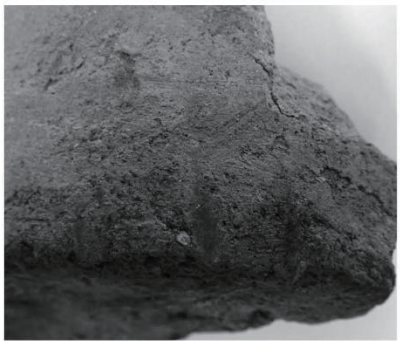
C：溝に素材の痕があり、平滑でないもの。こすりなどで確認できるもの。

D：底面の粘土がつぶれたような形状で、溝として視認が難しいもの

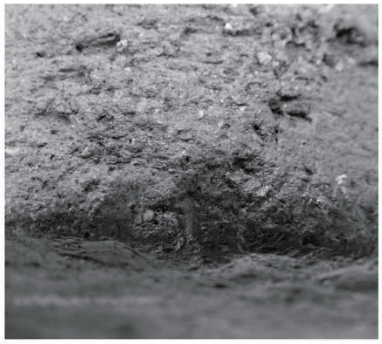
E：その他、小さなくぼみなど。溝とはっきりと断定できないもの

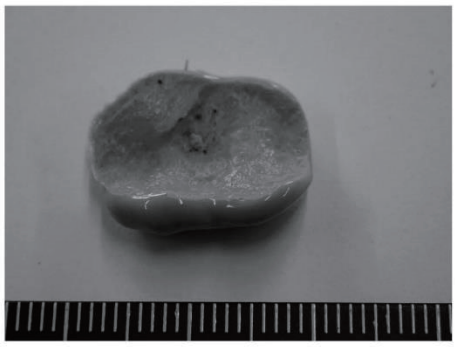
としました。なお、それぞれの分類は図５の通りです。

AA
(3 本 1 組)

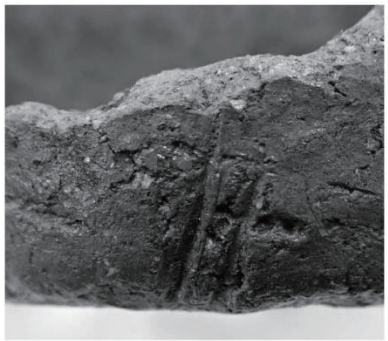


A
(2 本 1 組)

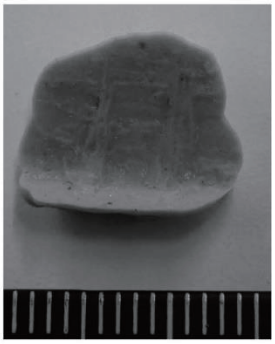




B
(2 本 1 組)



C
(2 本 1 組)



D
(組なし)

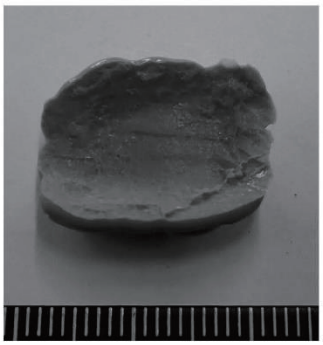


図５　溝の分類 (右は採取したレプリカ)

溝については、その個数よりも分類同士の組み合わせに意味があると考え、組み合わせが分かるものについて、その組み合わせを調査しました[6](図 6)。いずれも、同じ分類同士の組み合わせの割合が高くなっていました。D については、やや幅広い分布を示していました。

	AA	A	B	C	D	E
AA	12(6.3%)	27(14.2%)	13(6.8%)	3(1.6%)	3(1.6%)	
A		33(17.4%)	3(1.6%)	6(3.2%)	10(5.3%)	1(0.5%)
B			18(9.5%)	12(6.3%)		2(1.1%)
C				22(11.6%)	14(7.4%)	5(2.6%)
D					5(2.6%)	
E						1(0.5%)

※小数点第2位を四捨五入、濃い灰色は10%を超えるもの、薄い灰色は5%を超えるもの

図 6　溝分類の組み合わせ

(3)溝の組

溝の組は、1 箇所あたり、溝が何本 1 組になっているかを調査したものです(図 7)。なお組については、溝の角度が 25 度以内のものを同一としています。1 本 1 組が 33 個体(53.2%)、2 本 1 組が 18 個体(29.0%)、2 本 1 組？が 2 個体(3.2%)、3 本 1 組が 1 個体(1.6%)、1～2 本 1 組が 5 個体(8.1%)、1～3 本 1 組が 1 個体(1.6%)、2～3 本 1 組が 2 個体(3.2%)でした。

1 本 1 組が半数を占めましたが、2 本 1 組を持つ個体も 3 割を超えており、溝の単位にはバリエーションがあることが確認できました。

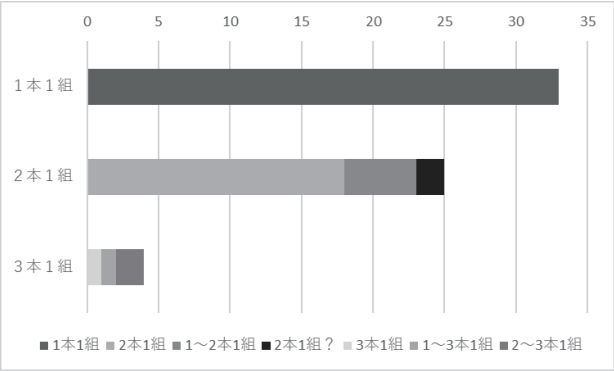


図 7　溝の組数の比較

(4)周縁における溝の単位数と配置

周縁における溝の配置については、文様割付の手法で用いられる模式図(小林 1999 ほか)を参考に調査しました(図 8)。なお、2 本 1 組以上のものは、その単位の中心線を設定し、角度を求めました。周縁をすべて残した残存個体が少ないため、不明も多くなっており、角度から単位数を推測した個体もあります。

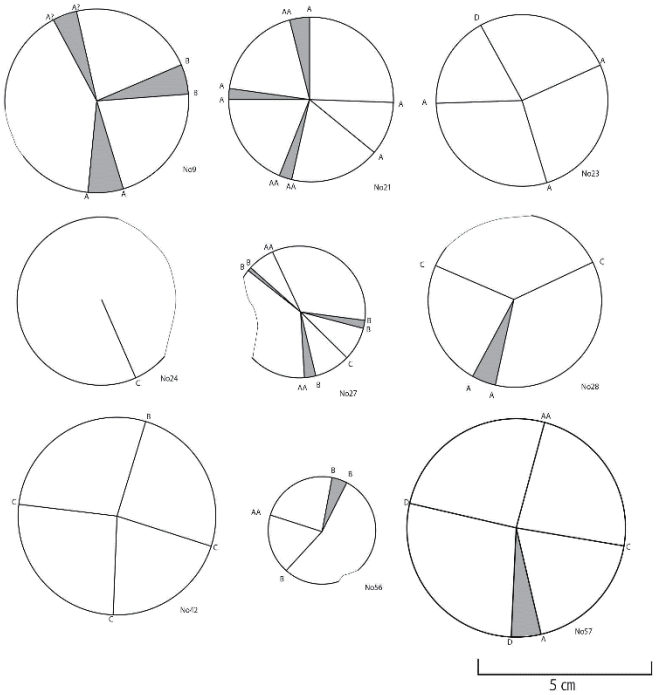


図 8　底部の文様割付

溝の単位数については判別が可能な 22 個体のうち、1 単位が 2 個体(9.1%)、3 単位が 1 個体(4.5%)、3 単位？が 1 個体(4.5%)、4 単位が 12 個体(54.5%)、4？単位が 1 個体(4.5%)、5 単位が 2 個体(9.1%)、5？単位が 3 個体(13.6%)でした。4 単位のものが半数を超えており、それ以上のものも含めると、8 割を超えます。

溝の配置については、溝同士の角度を計測し、等角度との差を求めました。各割付と等角度との差が 10 以下に収まるもの[7]をⒶタイプ、20 度以下に収まるものをⒷタイプ、20 度よりも大きな差があるものをⒸタイプとしました。判別可能な 20 個体のうち、Ⓐタイプが 4 個体(20%)、Ⓑタイプが 5 個体(25%)、Ⓒタイプが 11 個体(55%)でした。Ⓒタイプが半数を越え、厳密な割付は行われていませんでした。

(5)溝の幅と長さ

溝の幅と長さについて計測しました。幅については、最小 1.18 ㎜、最大 9.18 ㎜で、平均は 3.66 ㎜(±1.7)でした。また、長さについては最小 4.06 ㎜、最大 19.35 ㎜で、平均は 8.55 ㎜(±3.11)でした。

幅と長さの相関については両方が計測できた 60 個体において、相関係数 0.24 と弱い正の相関がみられました。相関係数については目立った特徴はありませんでした。

(6)溝が施されるタイミング

溝が施されるタイミングについては、研究史(芝崎 1972 ほか)より焼成前であることが分かっています。今回、焼成前のどの段階かを確認したところ、器面が荒く判定が困難だった 2 点を除く全 60 点が底辺部の調整をおこなった後であることが確認できました。うち 2 点については、縄紋施紋→底辺部の調整→溝の時系列が確認できました。

4、考察

(1)溝の特徴

溝の特徴に関しては、芝崎(1972)や新井(1996)に共通するものとして、

①いずれも深鉢である

②溝は多くが 4 つあり対照的である

③土器焼成以前に施されている

④関東地方の縄紋中期土器に属する

と整理されています。①については、浅鉢と思われる土器底部が 1 個体確認されました(1/浅鉢底部計 41、2.44%)。確率は低いものの、深鉢のみの痕跡ではありませんでした。②については、必ずしも 4 箇所ではない個体も存在し、多様なバリエーションが窺えました。③については、さらに底辺部の調整後から土器焼成前であることが確認できました。④については荒木(1996)の集成から、東北及び中国地方でも出土が確認されており、日本に広く分布する可能性があります。また、後述しますが、時代幅は広がる可能性が高いです。さらに、分析(3)より、その形態からより細かな特徴を確認しました。

以上、溝の特徴については、数量的分析を行えたことで、より具体的に特徴に迫ることができました。

(2)溝の用途

溝の用途については、紐をかける用途を見越して焼成前に溝をあらかじめ付したとする説、特殊容器説、火熱に関する説 (芝崎 1972)、文様区画説(新井 1996)が提唱されています。

今回の調査から分類 C や D のように意図して付したとは考えづらい、「えぐり込み」と言えない溝も存在しました。また、特殊容器とするには数が多く、文様の付されていない土器に溝が確認されるなど他についても異論があります。また、他の遺跡ではありますが、白久台遺跡の阿玉台式土器からは、口縁部にも紐で結んだような焼成前の溝が、底部の溝とほぼ同位置で確認できました[8]。底部はないものの、口縁溝に関しては、東大橋原遺跡・宮平遺跡の縄紋土器などからも確認できています[9]。そのため、底面から口縁にかけて紐で縛りつるすなどした痕跡であると考えます(図 9 ・10)。

さらに、紐のかかったタイミングは、一部の土器から、施文・施紋→底辺部の磨き→溝の形成と認識できるため、土器製作の中に組み込むことができ、以下のような手順を踏むものと思われます。

①土器を輪積みにより製作する

②製作した土器に施文・施紋する

③底辺部の磨きをおこなう

④紐をかける。

⑤土器を焼成する

紐は周縁の溝の配置から底面を通っているものと思われますが、その痕跡は敷物圧痕のように明確に可視化できるものは少ないです。そのため、施文・施紋や磨きなどを終え、底面に痕跡がつく程度の可塑性はない状態で、紐をつるす行為が行われたものと考えられます。その理由としては、土器の均一な乾燥があります。土器製作においては、口縁→胴部→底部の順に乾燥が早くなります。現在行われている土器製作においても、スノコの上に土器を置く(上高津土器づくりの会 2014 ほか)など、焼成後に土器が破損しないように、底面の乾燥に一定の工夫がなされています[10]。紐をかけ、つるすことによって、その乾燥の均一化を企図した可能性が考えられます。また、

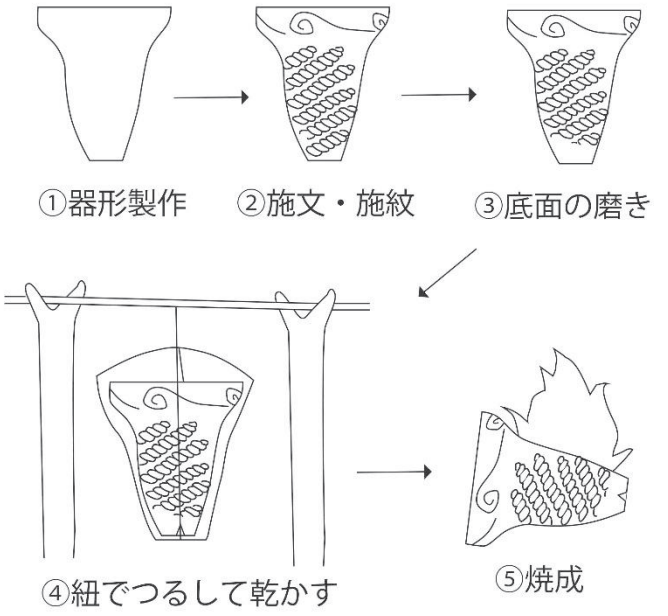
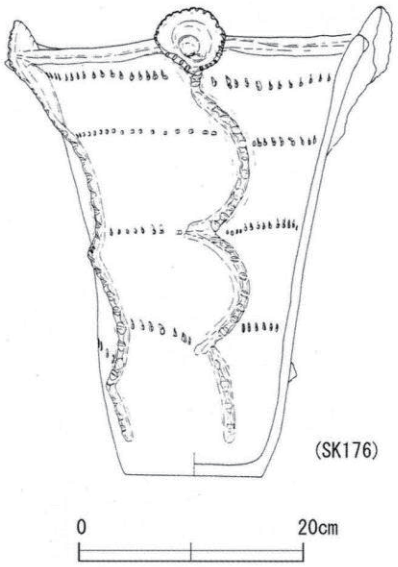
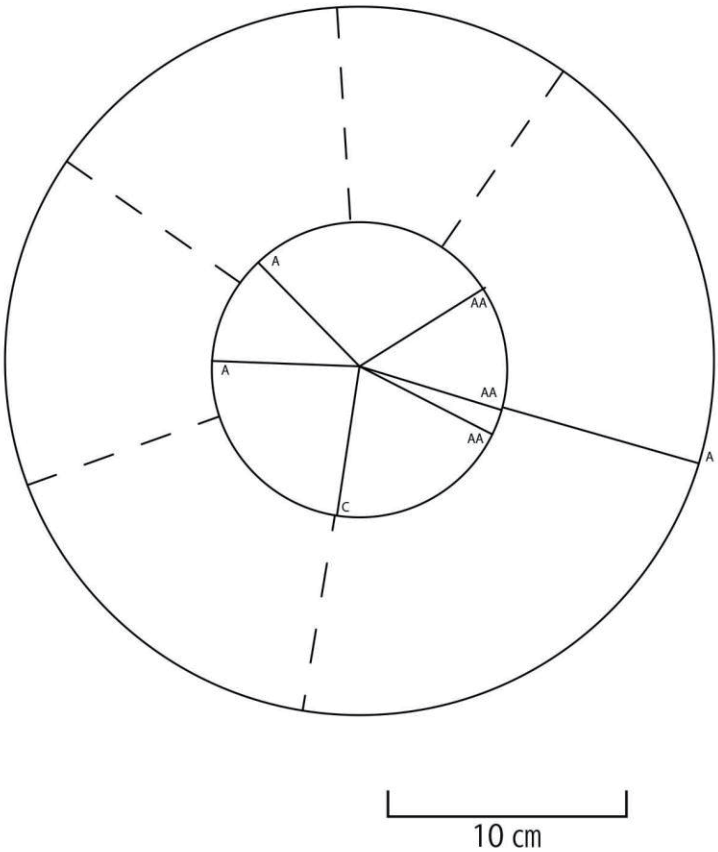
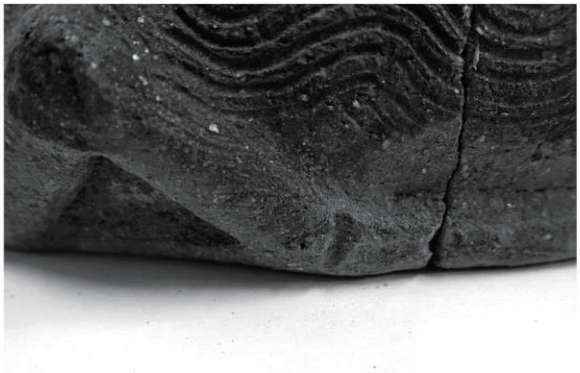


図 9　土器の製作過程







左上：白久台遺跡の口縁部溝、右上：口縁部溝と対応する形で確認された底部溝 A
中：口縁部溝が確認された白久台遺跡の実測図 (小川 2009 より引用改変) と
文様割付 (破線は口縁部の傷や欠け)
左下：東大橋原遺跡で確認された口縁部溝

図 10　白久台遺跡で確認できた口縁部溝とその他の例

キャリパー土器など一見不安定に見える土器については、床などに置いた際の転倒リスクを避ける意味でも有効であったと考えます。

つるす際には、溝の組が１～３本１組であること、溝の単位数が 4 単位以上であるものが多いことから、１～３本の縄を組にして十字に結んでいたものと考えられま

す。なお、文様割付から、配置については©タイプが多く、必ずしも正確な結び方をしていません。口縁の把手の位置や土器の比重から、つるす位置を微調整していたものと思われます[11]。

(3)溝の時間変化

考察(1)、(2)を踏まえた上で、溝の分類と土器製作の時間軸の関係性を探るため、土器を製作し、実験を行いました[12](図 11)。溝については、土器の柔らかさの変化から、

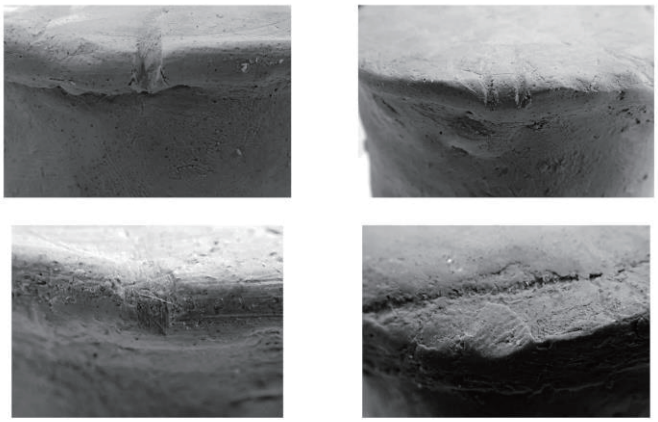
AA・A、B…C→D→底辺部調整痕の変化→視認できないもの

へと変化しました。紐にかけることが、乾燥のはじまり＝土器の完成と考えると、土器製作にどの程度の時間がかかったか、ある程度の目安が推測できました(図 12・13)。分析(2)で得られた結果ともある程度整合がみられます。

図 11　実験の様子

		土器の作成から紐でつるして乾燥させるまでの時間経過(目安)					
		0日目	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目以降
溝分類	AA						
	A						
	B						
	C						
	D						
	E						
	調整方向の変化など						
	視認が難しい						

図 12　土器の溝の分類と時間経過[13]



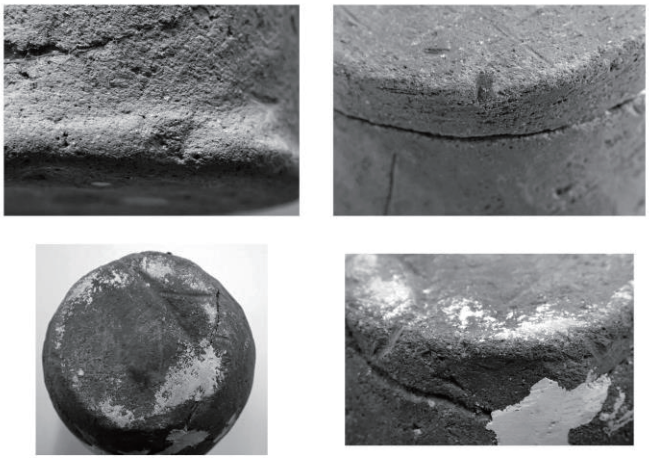
土器の実験による溝の変化
上：土器製作後４８時間後につるした際の溝。左から溝 AA および溝 A
下：土器製作後７３時間後につるした際の溝。左から溝 C および溝 D

図 13　製作実験による時間経過と溝

今回は資料的制約から完形土器の調査に乏しかったですが、文様が複雑な土器と簡素な土器などでの、土器製作の時間変化を終えるかもしれません。ただ、大きさや器形によって乾燥時間、可塑性の差異に注意する必要があります。また、紐にかけるまで、一時的に床などに保存している可能性も否定できません。

(4)土器の紐かけ乾燥の時期と場所

土器の紐かけ乾燥の時期については、縄紋前期および後期土器底部の一部を調査したところ、外山遺跡出土の浮島式土器および北垂貝塚出土の後期粗製土器の底部から同様の溝が確認されました(図 14)。そのため、少なくとも縄紋前期から後期までの土器の乾燥は、紐をつるす手法が一般的に存在したと考えます。なお、餓鬼塚遺跡出土の古墳時代の土師器甕でも同様の溝が確認できており、縄紋時代から古墳時代までの長期間の間、紐をつるす行為が行われていた可能性があります。今後、須恵器などを調査することで、窯やロクロなど生産体制や器形などの技術変化と紐かけ乾燥の終焉との関係なども推測できるかもしれません。



左上：浮島式土器底部溝。右上：後期粗製底部溝。
左下：溝が確認された土師器底部。右下：確認された溝（写真では２箇所）。

図 14　縄紋前期・後期および古墳時代土師器の溝跡

また、土器をつるす場所ですが、他の民族事例を参照(金子 2011 ほか)しても、竪穴住居内につるしたと考えるのが自然です。櫛原(2019 ほか)らが述べているような竪穴住居内での土器製作の傍証となりえます。

(5)溝の名称について

溝の名称については、「えぐり込み」については意図的行為が想起されるため、適しているとは言えません。「擦

り」についてはやや実態に近いものと思われますが、「こすり」「すり」「かすり」「なすり」など多くの読みが存在し、「こすり」などは意図的行為が想起されます。そのため、今回は暫定的なものとして、「すれ溝」を提案します。

おわりに

縄紋中期土器底部の溝について、悉皆的に調査を行い、縄紋時代の土器製作の一部を考察することができました。

今後については、溝の痕跡から紐の太さの推測がある程度可能であるため、器面に付されている縄紋との関係など、縄紋時代全般の紐・縄に関して具体性を高められる可能性があります。また、今回は「えぐり込み」と言われるような溝について調査しましたが、分類Dよりも見えづらいかすり跡・くぼみや、底辺部調整の方向の変化から紐かけの存在をうかがうことができました(図15)。より細かい分析を行うことで、縄紋土器の「紐かけ」の普遍性についても迫ることが可能になると思われます。

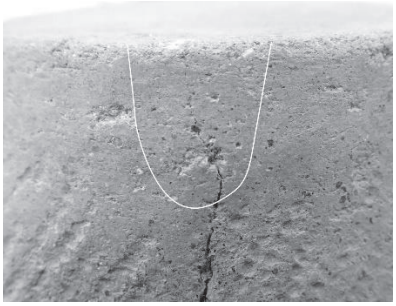


図 15　縄紋中期土器の底辺調整方向の変化の一例

また、口縁部には、その比重から、より痕跡が付着しづらいものと考えられますが、底部と口縁の溝の関係などを調査することで、紐かけの具体的な検討もできるものと思われます。さらに、弥生時代以降の土器に関しても具体的に調査していきたいです。

課題は山積していますが、石岡市の土器の整理により、より縄紋時代および土器製作の実態に迫ることのできる研究を継続して行うこととします。

謝辞

執筆にあたっては、佐々木由香・奈良部大樹・西本志保子・石岡市教育委員会のご協力を得ました。記して謝意を申し上げます。

註

(1)土器に紐をかけることについては、多くの指摘がそれ以前から見られます。1928年の千葉県古作貝塚から出土した貝輪の入った土器には「深い抉込部がある」(八幡1928;362)として土器のえぐり込みと紐との関係が述べられています。また、芝崎も指摘しています(1972;77)が、山内清男も「土器が懸垂された証拠はほとんどない」としながらも、「口端に近く孔があれば吊したと見当をつけるのは常識」(1964;152)とするなど、主に焼成後の紐かけについて議論されています。

(2)時代を統一するため、土師器・須恵器などは分析の対象から除外しました。

(3)文様割付の手法を参考としていますが、底部溝については始点が明確に規定できるわけではありません。

(4)なお、考察でも指摘しましたが、粘土変化などより細かい分析が今後重要になる可能性は高く、今後の課題とします。

(5)割合については土器底部全体のうち周縁部が認められない底部を除いた数を全体の数としました。

(6)溝分類のうち、判定が難しいものは組み合わせの対象から除外しました。

(7)小林他(2020 ほか)の角度割付型を一つの基準としました。

(8)底部と口縁の関係については、小林(1999)ほかの文様割付図に今回の底部・口縁部の溝の割付を合わせることで調査しました。

(9)偶然かもしれませんが、底部の溝と口縁の欠けが同位置の場合があります。口縁の紐かけがあり、周囲より脆いため欠けやすくなっていた可能性があります。

(10)陶芸でも、底面の乾燥は気にかけている。『陶芸教室』によれば、「壺のような作品の乾燥は 2 本の棒の上にのせて底面の部分の通風をよくしてやると、全体が同じ速度で乾燥するので失敗はほとんどありません」(森他 1976;132)と底面の乾燥に一定の配慮がなされている様子が確認できる。

(11)なお今回、1 単位のものも存在しました。底面の乾燥状態によっては、可視化できない溝も存在するようです。

(12)土器実験については実際に溝のある No27 の土器をモデルとしました。

(13) 時間は実験の結果から得られた目安であり、粘土の質、季節・気温・湿度で変化します。

文献

八幡一郎 1928「最近發見された貝輪入蓋附土器　下總古作貝塚遺物雑感の一」『人類学雑誌』43-8

大沢鷹邇・芝崎孝 1962「東京都・中村橋遺跡の中期縄文土器」『考古学手帖』14　塚田光

塚田光 1964「群馬県・新巻遺跡の中期縄文土器」『下総考古学』1　下総考古学研究会
山内清男 1964「縄文式土器・総論」『日本原始美術』1　講談社
芝崎孝 1972「底部にえぐり込み溝を有する土器とその類例」『考古学雑誌』58-1　日本考古学会
森淳・風間秀夫 1976『陶芸教室』創元社クラフトシリーズ
海老沢稔 1978「石岡市東大橋原遺跡」『第 2 回茨城県考古学研究発表会要旨』茨城県考古学協会・勝田市教育委員会
川崎純徳・海老沢稔・黒沢彰哉・松本裕治 1978a『石岡市東大橋原遺跡―第 1 次調査報告―』石岡市教育委員会
川崎純徳・黒沢彰哉・海老沢稔 1978b「茨城県東大橋・原遺跡における縄文土器焼成遺構」『月刊　考古学ジャーナル』155　ニューサイエンス社
海老沢稔 1979「3. 東大橋原遺跡第 2 次調査(石岡市)」『第 3 回茨城県考古学研究発表会要旨』茨城県考古学協会
川崎純徳 1979「フラスコ状土壙小考―石岡市東大橋原遺跡 3 号土壙素描―」『常総台地』10
川崎純徳・黒沢彰哉・海老沢稔・松本裕治・川又清明・横山仁 1979a『石岡市東大橋原遺跡―第 2 次調査報告―』石岡市教育委員会
川崎純徳・黒沢彰哉・海老沢稔 1979b「(9)茨城県石岡市東大橋・原遺跡の縄文土器焼成遺構」『日本考古学協会昭和 53 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
川崎純徳・海老沢稔・横山仁 1980『石岡市東大橋原遺跡―第 3 次調査報告―』石岡市教育委員会
財団法人鳥取県教育文化財団 1981 『鳥取県教育文化財団調査報告書 7：布勢遺跡発掘調査報告書』
(財)福島県文化センター1990『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 14』
丑野毅・田川裕実 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24　日本文化財科学会
荒木ヨシ 1995「縄文時代における分業の一考察」『物質文化』58
新井聡 1996「中台遺跡出土の，底部にえぐり溝を有する縄文土器について」『研究ノート』5　財団法人茨城県教育財団
小林謙一 1999「縄紋中期土器器面の文様割付について」『セツルメント研究』1　セツルメント研究会
小林謙一 2000「縄紋中期土器の文様割付の研究」『日本考古学』10　日本考古学協会
石岡市遺跡分布調査会 2001『石岡市遺跡分布調査報告』石岡市教育委員会
可児通宏 2005『縄文土器の技法』同成社
小杉山大輔 2007『市内遺跡調査報告書』2　石岡市教育委員会
後藤明 2007『土器の民族考古学』同成社
小杉山大輔・曾根俊雄 2008『市内遺跡調査報告書』3　石岡市教育委員会
小川和博 2009「石岡市白久台遺跡の土器」『常総台地』16　常総台地研究会
小杉山大輔・曾根俊雄 2010『市内遺跡調査報告書』5　石岡市教育委員会
金子守恵 2011『土器つくりの民族誌　エチオピア女性職人の地縁技術』昭和堂
上高津貝塚土器づくりの会 2014『縄文土器の作り方』上高津貝塚土器づくりの会
櫛原功一 2016「土器作りの場を考える」『土器を掘る―土器研究と圧痕法のいま、そして未来―』熊本大学小畑研究室・明治大学黒曜石研究センター・日本先史文化研究所
櫛原功一 2019「土器作りの場を考える―縄文集落からみた土器作り―」『土器作りから土器圧痕を考える』熊本大学小畑研究室
西本志保子 2019「南西関東における縄紋中期連弧文土器―文様割付からの検討―」『日本考古学』49　日本考古学協会
小林謙一・小林尚子・中山真治 2020「府中市内出土縄紋中期土器の文様割付」『武蔵府中を考える』2　府中市史編纂委員会・府中市
金子悠人・西本志保子・小林謙一 2023「東大橋原遺跡における自然科学的分析―レプリカ法による圧痕調査と年代研究を中心に―」『中央史学』46　中央史学会

付表 1　東大橋原遺跡における溝一覧

番号	遺跡名	編組ID	テン箱	時期	器種	溝の組	溝の分類					周縁単位	割付タイプ	溝の配置					溝の幅(mm)	溝の長さ(mm)	溝が施されるタイミング	敷物圧痕	
							溝1	溝2	溝3	溝4	溝5			角度差1	角度差2	角度差3	角度差4	角度差5				編組技法	付加技法
1	東大橋原	6	79C3	中期	深鉢	1本1組	C					不明							3.05	7.14	磨き後	ござ目	
2	東大橋原	10	79C7	中期	深鉢	1本1組	B					不明							1.91	10.83	磨き後	葉縁？	
3	東大橋原	11	79C3	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							1.20-1.60	5.64-6.21	磨き後	ござ目	ヨコ添え巻き付け？
4	東大橋原	19	79C8	中期	深鉢	2本1組?	A	A/D	AA/A?			5？	Ⓒ	-8	-44				3.30-6.78	6.99-9.67	磨き後	ござ目	
5	東大橋原	21	79C6	中期	深鉢	1本1組	A	C	e			4？	Ⓒ	15	-53				3.18	5.76	磨き後	ござ目	
6	東大橋原	26	79C6	中期	深鉢	1本1組	C					不明							2.72	6.78	磨き後	編組不明	
7	東大橋原	34	—	中期	深鉢	2本1組	AA/AA					不明							7.76-10.6	12.97-14.67	磨き後	3本飛びござ目	
8	東大橋原	39	78B6	中期	深鉢	1〜3本1組	AA/AA/AA	A				5？	Ⓑ	-13					3.17-6.47	5.79-12.24	磨き後	ござ目系	
9	東大橋原	40	77耕	中期	深鉢	2本1組	A?/A?	B/B	A/A			4	Ⓐ	9	8				1.43-3.92	5.33	磨き後	ござ目	
10	東大橋原	59	79B2	中期	深鉢	2本1組	A/A					不明							2.61-3.20	7.9-9.49	磨き後	3本飛びござ目	
11	東大橋原	76	78C2	中期	深鉢	2本1組	A/A					不明							5.29-5.66	4.67-4.74	磨き後	ござ目系	
12	東大橋原	100	77耕5	中期	不明	2〜3本1組	AA/AA/AA	A/A				5？	Ⓒ	-29					3.25-3.66	8.02-14.31	磨き後	編組不明	
13	東大橋原	101	77耕2	中期	深鉢	1本1組	D					不明							2.72	4.71	磨き後	ござ目系	
14	東大橋原	103	77耕5	中期	深鉢	2本1組	B/B					不明							2.06-2.85	6.5-7.36	磨き後	ござ目系	
15	東大橋原	105	78B1	中期	深鉢	2本1組	B/B	C/C				4	Ⓐ	10					1.65-3.25	5.08-8.37	磨き後	3本飛びござ目	
16	東大橋原	128	785C	中期	深鉢	1本1組	A?	C				4	Ⓐ	6					2.89-3.46	5.58-6.15	磨き後	3本飛びござ目	
17	東大橋原	129	77C2	中期	深鉢	1本1組	A					不明							2.89	6.76	磨き後	網代？	
18	東大橋原	133	78C5	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							1.39-1.47	3.93-4.19	磨き後	ござ目系	
19	東大橋原	136	78C5	中期	深鉢	1本1組	A					不明							4.83	7.62	磨き後	ござ目系	
20	東大橋原	138	78C5	中期	深鉢	1本1組	A					不明							3.52	7.28	磨き後	3本飛びござ目	
21	東大橋原	154	79B2	中期	深鉢	1〜2本1組	AA/AA	A/A	AA/A	A	A	5	Ⓒ	-34	-6	4	8	28	3.63-5.43	8.39-15.04	磨き後	ござ目系	
22	東大橋原	178	77C3	中期	深鉢	1本1組	AA					不明							4.19	9.2	磨き後		ヨコ添え巻き付け
23	東大橋原	181	79B4	中期	深鉢	1本1組	A	A	D	A		4	Ⓒ	5	6	-26	15		2.29-3.78	5.26-8.32	磨き後	3本飛びござ目	
24	東大橋原	185	不明	中期	深鉢	1本1組	C					1	無						2.16	12.85	磨き後	ござ目系	
25	東大橋原	—	77C2	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							2.15-2.57	5.24-5.69	磨き後	×	
26	東大橋原	—	77C3	中期	深鉢	1本1組	B					不明							1.72	不明	磨き後	×	
27	東大橋原	—	78A5	中期	深鉢	1〜2本1組	B/B	C	AA/B	B/B	AA	5	Ⓒ	- 82	18	-74	-70		1.75-6.18	9.86-18.46	磨き後	×	
28	東大橋原	—	78B3	中期	深鉢	1〜2本1組	A/A	C	C			3？	Ⓒ	16	-26				3.09-3.87	9.64-10.35	磨き後	×	
29	東大橋原	—	78B6	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							1.63-1.85	4.93-6.61	磨き後	×	
30	東大橋原	—	78C1	中期	深鉢	1本1組	C	C				4	Ⓐ	-10					3.65-3.93	6.51-9.28	磨き後	×	
31	東大橋原	—	78C11	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							1.83-2.38	4.81-6.70	磨き後	×	
32	東大橋原	—	78C12	中期	深鉢	1本1組	A					不明							5.49	10.93	磨き後	×	
33	東大橋原	—	78C12	中期	深鉢	1本1組	C					不明							6.29	8.78	磨き後	×	
34	東大橋原	—	78C12	中期	深鉢	1本1組	C					不明							7.41	6.3	不明	×	
35	東大橋原	—	78C2	中期	深鉢	1本1組	D	D	C/c	D		4	Ⓒ	15	-10	-25	20		1.37-9.85	3.83-4.72	磨き後	×	
36	東大橋原	—	78C3	中期	深鉢	1本1組	C					不明							2.56	4.91	磨き後	×	
37	東大橋原	—	78C3	中期	深鉢	1本1組	A					不明							3.19	10.27	磨き後	×	
38	東大橋原	—	78C3	中期	深鉢	1本1組	A					不明							4.15	8.6	磨き後	×	
39	東大橋原	—	78C3	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							2.11-2.77	8.61-10.35	磨き後	×	
40	東大橋原	—	78C4	中期	深鉢	1本1組	C					不明							1.18	8.97	磨き後	×	
41	東大橋原	—	78C4	中期	深鉢	1本1組	AA					不明							5.08	19.35	磨き後	×	
42	東大橋原	—	78C4	中期	浅鉢	1本1組	C	C	C	B		4	Ⓑ	9	1	-15	5		2.77-7.01	8.24-10.03	磨き後	×	
43	東大橋原	—	78C5	中期	深鉢	1本1組	C					不明							4.65	6.83	不明	×	
44	東大橋原	—	78C7	中期	深鉢	1本1組	A					不明							4.51	8.16	磨き後	×	
45	東大橋原	—	78C7	中期	深鉢	1本1組	A					不明							5.07	9.62	磨き後	×	
46	東大橋原	—	78C8	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							3.44	不明	磨き後	×	
47	東大橋原	—	78C9	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							1.06-2.02	3.89-8.53	磨き後	×	
48	東大橋原	—	79C2	中期	深鉢	1本1組	D					不明							4.75	7.42	磨き後	×	
49	東大橋原	—	79C2	中期	深鉢	3本1組	C/C/C					不明							3.06-3.40	8.18-9.08	磨き後	×	
50	東大橋原	—	79C3	中期	深鉢	1本1組	A					不明							3.69	9	磨き後	×	
51	東大橋原	—	79C3	中期	深鉢	2本1組	C/C					不明							1.22-2.05	4.32-5.39	磨き後	×	
52	東大橋原	—	79C3	中期	深鉢	2本1組	B/B					不明							1.27-1.37	16.50-17.20	磨き後	×	
53	東大橋原	—	79C6	中期	深鉢	2本1組	C/C	e	e			3	Ⓒ	32	14	-46			2.23-2.34	4.99-7.99	磨き後	×	
54	東大橋原	—	79C8	中期	深鉢	1本1組	AA					不明							3.4	16.05	磨き後	×	
55	東大橋原	—	—	中期	深鉢	1本1組	B/B	e				1	無						2.45	7.94	磨き後	×	
56	東大橋原	—	77耕5	中期	深鉢	1〜2本1組	B	AA	B/B			4	Ⓒ	0	-26				1.05-2.82	7.71-13.03	磨き後	×	
57	東大橋原	—	—	中期	深鉢	1〜2本1組	A/D	D	AA	C		4	Ⓑ	19	-15	-6	2		4.99-10.31	7.97-18.79	磨き後	×	
58	東大橋原	—	—	中期	深鉢	1本1組	C	D	C	D		4	Ⓒ	-4	-9	-22	35		5.46-11.13	6.18-9.71	磨き後	×	
59	東大橋原	—	—	中期	深鉢	2本1組	A/A	A/D	A？/A？			4	Ⓑ	3	-11				3.53-4.57	9.48-9.89	磨き後	×	
60	東大橋原	—	—	中期	深鉢	2〜3本1組	A/A/A	A/A				4	Ⓑ	- 12					3.16-4.19	7.30-10.37	磨き後	×	
61	東大橋原	—	—	中期	深鉢	1本1組	D	C	c			不明							4.86	10.29	磨き後	×	
62	東大橋原	—	—	中期	深鉢	2本1組?	AA	AA				不明							3.21-4.17	6.10-7.19	磨き後	×	